2024年12月総評 暮田真名

洋梨のかたちを受ける
手のかたちを、
これも習作だから忘れる
藤井　柊太

わたしたちはなにかを受け取るたびそのものに応じた手の形を作っては解いている。その一つ一つをデッサンのように描き出した歌。三句目の字余りは実際に洋梨のおもさを腕に受けたかのような感覚を生じさせる。

水仙の咲けば出るところに出ます
松下　誠一

「出るところに出る」はトラブルの際に公的な機関に訴えることを指す口語表現だが、初句で「水仙」をおぼえた目には巨大な水仙の花が警察署の中へニュッと突き出るような異様な光景を見せてくれる。

まばたきが星座を逃がす
どうするの
お金があって暮らしがなくて
石村　まい

上句は「星座から目を逸らした」ということか、下句は「仕事に忙殺されて経済的には豊かだが人間らしい生活を営む余裕がない」ということか。散文的にパラフレーズしようとすると漏れていくものがむしろこの歌の本質であるような気がする。上句が見せるまばたきの風で飛ばされていく星座のまぼろしだとか、それがきらきらちらばる貨幣や紙幣に変身する様子だとか。

略語から和製英語へお歳暮を
伊井　豊浩

一つ一つの単語を取り上げるのではなく「略語」や「和製英語」と括ることで家族（集団）のニュアンスが生まれる。言葉の中ではどちらかといえばパチモノ感のある二つのカテゴリーがかしこまってお歳暮を贈ったりもらったりしているところを想像すると笑える。

天使へも届くだろうか赤紙が
青木菓子

国民皆兵の世になれば、天国にいる天使も戦力にかぞえられるかもしれない。「赤紙」という言葉についた特有の陰影が、「天使」というつるんとした手ざわりの言葉に実在の重みを与えている。

どう考えても波打ち際で離婚した
小薬　味

名前を書いてもお城を作ってもすぐ波にさらわれてしまう「波打ち際」はたしかに離婚にふさわしいような気がするけれど、それにしても離婚って室内でするものじゃないの？といった通り一遍の感想が、すべて最初の「どう考えても」に打ち消される。それならしょうがないか。

缶詰のなかは清潔クリスマス
絵巻

たとえば食べ終わった鯖缶をゴミに出すときなどは内側をきれいに洗わなければいけないから、「清潔」という言葉にはいったん立ち止まらされる。しかし保存期間を考えればたしかに開けるまでの缶詰の内側は相当に衛生的だ。その一見矛盾した清潔さが、スノードームのようでも、人体のようでもある。

QRコードに迷い込んだ犬
さほ

犬がとぼとぼと歩く道を上空から見るとQRコードの形になっていた……というような実景に即した解釈もできるが、わたしたちがふだん目にするサイズのQRコードと、QRコードを

読み込むことで立ち上がるサイトのはざまのような、四次元的な空間に迷い込んでいるのだ、と読んだほうが、句が生きると思う。

ちくわぶのような形の吹き出しで
叫んだ
夏の木陰を過ぎて
狛犬　吠

あのトゲトゲのかたちの吹き出しってことですよね。デジタルが主流になった昨今の漫画は吹き出しもきれいに成形されているが、「ちくわぶ」によって手描きの素朴さが想起される。「絵柄」が吹き出しによって指定される感覚が新鮮。

休みたいけど縄飛の輪の中で
檜野　美果子

加わったら最後じぶん一人抜け出すわけにはいかないということ、周りに迷惑をかけないために飛び続けるしかないということ、疲弊して足をもつれさせようものなら周囲から向けられるであろう非難の目……そうか、各々が「縄飛の輪の中」にいるのか、と目を開かれた。